

英・米・豪の英語に共通する語用指標記述の試み

— 初対面会話に見られる「聞き直し」の分析から —

Describing Common Pragmatic Features of Inner Circle Englishes:
Through An Analysis of Clarifications in First-Encounter Conversations

津田 早苗

Sanae TSUDA

キーワード：聞き直し、語用指標、英・米・豪の英語、初対面会話、対人関係機能

Key words : clarification, pragmatic index, British, American and Australian English
first-encounter conversation, inter-personal function

要約

本研究は、日本語母語話者の英語会話能力育成のための国際標準英語の語用指標記述を行う共同研究の一部として、英・米・豪の英語会話に見られる「聞き直し」の語用の分析を行う。異文化間会話において「聞き直し」は重要な機能を果たすが、母語話者間の会話では、相手の発話が聞き取れない場合や、理解できないことは稀で、「聞き直し」は少ないと予測される。分析の結果、会話データ中に「聞き直し」の出現数は量的な分析をするほど多くはなかった。質的な分析を行った結果、3種のどの英語話者も「聞き直し」が必要な時には躊躇せず相手に聞く点で共通していた。出現例を、「聞き直し」と「確認」に分け、それぞれについて用法を分析した結果、「聞き直し」と「確認」共に本来の機能に加え、聞き手の驚きや興味を表現するためにも用いられ、時には「聞き直し」の形式をとりながら、冗談として利用されることがわかった。これらの「聞き直し」の語用の分析には、「聞き直し」の形式をとりながら会話を維持・促進し、相手を知ろうとする英語母語話者の姿勢があらわれていると言える。この分析結果は日本語母語話者間、英語母語話者と日本語母語話者の異文化間の会話の「聞き直し」との比較に必要な国際標準的な英語の語用指標を記述するための基礎研究の一部となる。

Abstract

This study is a part of the group research whose purpose is to foster cross-cultural English conversational competence of Japanese learners of English. It aims to find pragmatic indices of clarification requests/questions in British, American and Australian English conversations. In the data analyzed, there are not many clarifications since the

conversation participants are English native speakers who do not have difficulty in understanding what others say. Since the numbers of clarifications in the data are limited, they are analyzed qualitatively. The analysis of clarifications and confirmations shows that they are used not only for the primary purposes of clarifying message but also utilized to express surprise or make a joke in order to maintain conversation and build rapport among the participants. The result of this study will make up a basis for a description of pragmatic indices of World Standard English (WSE), which will be compared with the pragmatic features of clarifications in Japanese native speakers' or cross-cultural conversations.

I. 研究の目的

本研究の目的は英・米・豪の英語の初対面会話における「聞き直し」を分析し、標準的な英語の「聞き直し」の語用指標を明らかにすることである。「時計持っていますか」という質問が、「今何時か教えてください」という依頼として使われるように、「聞き直し」にも状況に応じて異なる語用があり、英語と日本語の「聞き直し」にもそれぞれの言語文化を反映した異なる側面があると考えられる。本研究では上記の3種の英語に見られる相違点・類似点を分析し、共通に見られる「聞き直し」の語用指標を明らかにする。

I. 1. なぜ英・米・豪の英語の分析をするのか？

「聞き直し」の分析に入る前に、英・米・豪3種の英語会話データを分析する理由を説明する。分析に用いる会話データは英語の語用指標の記述を目指す共同研究¹のために上記の内心円の英語 (inner-circle Englishes) の使われる地域で収録した英語母語話者による英語の会話である。英語は母語として上記の地域などで話されるだけでなく、第二言語・国際コミュニケーションのための言語として世界で広く使われている。このような多様性から世界には様々な英語の変種があり、英語によるコミュニケーションの際に用いられるトピックシフトやポーズなどの語用について、様々な地域の文化の影響による多様性が見られ、異文化間の摩擦の原因となっている (大谷 2007a、重光 2008)。日本の英語教育について考えると、英語変種間の差はあるものの、英語の統語構造・語彙については統一的な規範があり、これらを教育する際には大きな混乱はない。しかし、語用面に関しては母語としての英語間の違いや、日本語の語用との違いについて日本の英語教育において意識的に取り上げられることはあまりない。このため、国際的な対人的なコミュニケーションの場面で、語用の理解不足が、多くの異文化間の誤解の原因となっている (重光ほか 2006、大谷 2007b)。

語用の理解不足による誤解を生まないようにするには、国際的に英語でコミュニケーションを

行う際に、学習者が国際的に共通する標準英語（World Standard English=WSE, Svartvik and Leech 2006, p.226）の語用指標を学習者に明示的に示すことが必要である。この共同研究は、母語としての英語の一つだけの変種や、母語としての英語のみに偏らない国際的に標準的な語用指標の明示的な記述を目指している。国際共通語として英語を用いる日本語母語話者がこのような英語の語用指標を知ることは、日本語との違いを意識することができ、国際コミュニケーションにおける誤解を避けるための有効な方策となると考えられる。このような考えに立ち、ここで、まず英・米・豪に共通する語用指標を明らかにするために、3つの英語変種の「聞き直し」の分析を行うのである。

1. 2. 「聞き直し」の分析の目的

「聞き直し」とは会話における質問の一種であり、相手の発言が聞き取れない場合や、相手の発話の意図を確認する必要がある時に用いられる。「聞き直し」が一般的な質問と異なるのは相手の直前の発話について理解できなかったことを相手に知らせ、不明な点を確認することにある。「聞き直し」の第一の機能は聞き損なった相手の発話について正しい情報を得ることであることから、相手の発話を理解できない状況の起きやすい第一・第二言語習得において研究対象とされてきた。つまり「聞き直し」により、情報が明確になり、より多くの情報を得られるので、多くのインプットが得られるため言語習得が促進されると考えられる（Ozaki 1989、Pica 1987）。第二に「聞き直し」は、相手の発話が理解できなかった場合、「聞き直し」をするかしないかについて、話者または相手のフェイス（面子）との関係が問題となる。「聞き直し」をすれば、相手の発話を理解できなかったことが相手にわかるので、自分の言語能力の不足を相手に知られる危険を犯すことになる。また、相手の発話がわかりにくい場合に「聞き直し」をすれば、相手の言語能力の不足を指摘し、相手に気まずい思いをさせる場合もある（Ozaki 1989、p.48）。

たとえば、異文化間の会話において日本語母語話者は、日・英語会話のいずれにおいても相手の発話が理解できない場合に「聞き直し」をせず、会話の流れから相手の発話を理解しようと努めるが、これは相手または自分のフェイスを損なう危険を犯さないようあえて「聞き直し」を避けるのである。これに対し、英語母語話者は相手の発話が理解出来ない時に、どちらが非母語話者であるに関わらず、「聞き直し」を避けずに積極的に質問し、会話を円滑に進めようとする傾向がある（Tsuda 2008）。このように「聞き直し」は直前の発話が理解できない場合に正しい情報を得る手段だが、その語用に関しては日本語母語話者と英語母語話者が何を重要視するかに差があると思われる。本論ではここに述べた異文化間会話ではなく、英語母語話者間の「聞き直し」を考察する。

II. 会話データ

会話データは2010年に共同研究者たちがそれぞれアメリカ、オーストラリアおよびイギリスに行き、現地で収録したものである。データの変数を制限するために次のような条件のもとに収録し、会話収録直後に参加者1人1人にインタビューを実施した。録画・録音された会話とそれを書記化したもの、および会話後のインタビューを分析用のデータとした。

1. 会話データの詳細

会話の長さ：1会話30分

会話の数：英・米・豪それぞれ3会話、合計9会話

会話の参加者：1会話3名

会話の設定：30分間の初対面会話を行う状況設定は「参加者は互いに初対面であり、共通の友人宅のパーティーで会い、30分間会話をする」と参加者に説明した

参加者の性別：男性

参加者の年齢：20代～40代

参加者の学歴：学士またはそれ以上の大学生・大学院生・社会人

参加者の母語：家庭でも学校でも英語を使う英語母語話者（収録前にそれぞれの英語変種の母語話者として適格かを知るため、出身地・家庭で使用する言語・長く暮らした場所などについて各参加者の言語プロフィールを作成した）

2. データ収録の時期、場所

時期：2010年9月から2011年2月にかけて、共同研究者達が英・米・豪の次の各地で映像録画と音声録音による会話収録を行い、会話直後に個人別のインタビューを実施した。

収録場所：

イギリス：オックスフォード、マンチェスター、ロンドン

アメリカ：テキサス州オースティン

オーストラリア：シドニー

3. 分析データに用いた記号

表1

データ種類	会話番号	話者番号		
イギリス	No.27	B2	B4	B5
	No.53	B15	B16	B17
	No.57	B21	B22	B23
アメリカ	No.31	U1	U2	U3
	No.39	U8	U11	U12
	No.40	U7	U9	U11
オーストラリア	No.43	Au4	Au6	Au7
	No.47	Au5	Au12	Au13
	No.50	Au16	Au17	Au15

- ・会話番号は収録した時系列順にふられた会話データ番号である。
- ・話者番号のBはイギリス英語話者、Uはアメリカ英語話者、Auはオーストラリア英語話者を意味する。

Ⅲ. リサーチ・クエスチョン

1. 英・米・豪の「聞き直し」には違いが見られるだろうか？
2. 英・米・豪の「聞き直し」に共通する語用指標となる特性は何だろうか？

Ⅳ. 分析

1. 量的分析

表2

	イギリス英語	アメリカ英語	オーストラリア英語
「聞き直し」数	9	6	11

予測された結果ではあるが、母語話者間の会話において相手の発言を聞き取れないことはあまりないので、異文化間や大人と幼児との間の会話に比べて「聞き直し」をする必要があまりない。上記の表の示すとおり、9件の会話においてそれぞれの英語の比較が可能なほどの「聞き直し」の数に満たない。今後に予定している収録会話全部の分析において量的分析を行うこととし、以下では、それぞれの会話について質的分析によって英語母語話者間の「聞き直し」の特徴を見る。

2. 質的分析

2.1 「聞き直し」と「確認」

「聞き直し (clarification questions/requests)」は直前の会話を理解できなかった会話参加者によってその意味や意図を確かめるために用いられる。下記の会話(1)～(3)の示すように、相

手の発話が聞き取れなかった場合に相手が何を言ったかを知るための(1)「聞き直し」(clarifications)に加え、相手の発話は聞き取ったが自分の理解を正しいかを確認める(2)(3)「確認」(confirmations)も直前の会話に関して用いられる。以下では「聞き直し」と「確認」の例をあげる。会話中の下線は「聞き直し」を表す。

(1) 「聞き直し」

B17: But he is huge though isn't he?

B16: He's what?

B17: He is huge sort of... (No.53, p.10)

B17: だって彼はでかくない?

B16: えっ?何?

B16: でかくない?どっちかというと。

これはイギリス英語話者の会話であるが、B17の発話を聞き損ったB16が聞き直し、B17が自分の発話を繰り返している。聞き損ったB16は何のためらいもなく、聞き直している。B17は自分の発話を sort of という緩和表現を加えて繰り返している。

「確認 (confirmation)」は自分が聞いた相手の発話が正しかったかどうかを確認するために用いられる

(2) 「確認」

B15: Where do you teach?

B16: Where do I teach? (No. 53, p.6)

B15: どこで教えているの?

B16: どこで教えているかってこと?

これもイギリス英語話者の会話だがB15の質問をB16はもう一度くり返すことにより相手の発言について自分の理解が正しかったかを確認している。

(3) 「確認」

B17:So, when Hannah came back, she just couldn't speak English for the

first, sort of, 3 days and that was just because she had been immersed in the Japanese language.

B16: That's your [daughter.]

B17: [My daughter] yeah. (No. 53, p.11)

B17: …ハナが帰って来たとき、最初の3日くらいだったか、英語が話せなかったんだ。日本語の環境に浸っていたのでね。

B16: それって娘さんのことでしょ。

B17: そう、娘だよ。(B16, B17のdaughterの部分は同時発話)

これも同じ会話データからの例であるが、B17が説明なしにHannahと言ったので、B17はその名前がB17の娘であることを確かめている。

2.2 「聞き直し」の分析

(1)の例に示したように、「聞き直し」は直前の発話を聞きそなった時に用いられる。

(4) U11: It's I still just like it. So, but uh so I went uh to undergraduate at, in Detroit at a place called Wayne State University.

U9: Oh yeah. I've heard of Wayne State.

U11: Yeah.

U9: They've got a football team.

U11: What's that?

U9: They have a football team, right?

U11: They do have a football team, and the football team plays football. (all laugh) (No.40 p.12)

U11: そこ(デトロイト)が好きでね。でも、ええと、学部はウェイン・ステート大学というところに行ったんだ。

U9: ああ、ウェイン・ステートって聞いたことあるよ。

U11: そお

U9: フットボールチームがあるよね。

U11: えっ、何?

U9: フットボールチームがあるよね、そうじゃない?

U11: フットボールチームはあるよ。フットボールチームはフットボールをするのさ。

(全員笑う)

アメリカの会話において U11 が自分の出身大学がウェイン・ステート大学であると説明すると、U9 が「フットボールチームあるよね」と発言する。簡単な発話であるにも関わらず U11 は U9 に「えっ、何？」と聞き返している。そして、U9 のくり返しの後、U11 はフットボールについて話すことに興味を感じないらしく、「フットボールのチームはあるよ。フットボールチームはフットボールをするのさ」と答え、全員が笑うが、話題はそれ以上に進展しない。

「聞き直し」は相手の発話を聞き取れなかった時だけではなく、相手の使った表現を理解できないときにも用いられる。

(5) Au5: What are you doing post graduation?

Au12: I () I have actually got a job lined up for next year. I um, I am working part time at this company that does RFID research um, research in [Unclear]

Au13: RFID

Au12: Sorry, sorry.

Au13: I have no idea.

Au12 Radio-frequency identity tags. Effectively,

Au5: Oh.

Au12: they are just like bar codes, but you can scan them from a distance and read them through walls and things like that. (No.47 pp.1-2)

Au5: 卒業後はどうするつもり？

Au12: 実は来年のための仕事はあるんだ。僕がパートで働いてる会社で、ここは RFID の研究をしているんだけど… [聞き取り不明]

Au5: RFID って…

Au12: ごめん、ごめん

Au5: 全然わからないよ。

Au12: Radio-frequency-identity tags (通信周波数同定標識) のことさ。効果的にね。

Au5: ああ

Au12: バーコードみたいなもので、遠くからスキャンできて、壁みたいなのところでも透して読むことができるんだ。

(5)ではオーストラリアの会話において、それぞれの参加者が自分の専門について話している。Au5だけが学部生で、他の二人は大学院生なのではっきりとした専門分野を持っている。Au12の使った RFID という専門用語がわからないので、Au5は「RFID」と繰り返す。すると Au13は自分が専門用語を使ったことを「ごめん、ごめん」と謝ってから、それが Radio-frequency identity tags の頭文字であり、バーコードのようなものだと説明をしている。

(4)(5)のどちらの例においても、直前の発話を理解できなかった参加者は「聞き直し」をすることによって不明な点を解消している。母語話者間の「聞き直し」の例は少ないが、初対面の会話であっても、相手に「聞き直し」をためらう様子は全くなく、(4)では、相手に What's that? とあからさまに聞き、(5)では学部生が自分より年長の大学院生に RFID とくり返して説明を求めている。日本語学習の分析を行った Ozaki 1989 に説明されているフェイスへの配慮や、異文化会話を分析した Tsuda (2008) で見られた「聞き直し」を避け、状況から理解しようとする態度は英語母語話者間のこれらの会話では見られない。

2.3 「確認」の分析

例(2)、(3)で示したように、直前の発話について自分の理解が正しかったかを確認するために用いられるのが「確認」である。下の例では「確認」を使い、会話の参加者が会話を楽しんでいる様子がうかがわれる。母語話者間では「聞き直し」や「確認」の形をとりながら、笑いを誘っている例が多くある。

- (6) U11: But outside there was this bear, like this like bear in this eh area, where this guy him wear like a little vest and a little hat, he just constantly fed him pineapple all day
- U12: The bear?
- U11: Yeah, like there was this big brown bear.
- U8: Whoa.
- U11: [Yeah, it was so sad.]
- U12: [They love pineapple.]
- U8: I don't know.
- U11: They're bear. They love it.
- U12: (laugh) He's found a lot of these bear around there. He eats all the pineapple he can eat.
- U11: No, no, no. People staring at him all day.
- U8: Moscow doesn't seem like a good bear zone. (laugh)

[] は同時発話を示す

(No. 39 p.18)

- U11: 外にはこの熊がいたんだ。こんな熊がね。この辺では男がベストと小さな帽子をかぶって、一日中熊にパイナップルをひっきりなしに食べさせているんだ。
- U8: 熊だって？
- U11: ああ、でかい茶色の熊がいたんだ。
- U8: へー
- U11: かわいそうだったよ。
- U12: 熊はパイナップルが好きなんだ。
- U8: そんなこと知らないよ。
- U11: 熊だもの。好きさ。
- U12: (笑い) 熊がいっぱいいたんだってさ。食べられる限りのパイナップルを食べたんだって。
- U11: いやいや、まわりの人が熊を一日見つめているんだ。
- U8: モスクワは熊に良い場所とは思えないけど (笑い)

(6)はアメリカの会話で、U11 がロシアの町で見た熊について話している。彼はみやげ物店で買い物をしながら窓の外に熊を見た話をする。U8 は確かに熊についての話だと思うが、「熊？」と U11 が本当に熊と言ったのかを確認する。U11 のロシアの町の話に熊が出てきたことへの驚きを、U8 は「熊？」という「確認」によって示していることは、U8 が「へー (Whoa)」と発言していることからわかる。その後は3人がモスクワと熊とパイナップルの取り合わせについて話し、笑っている。

(6)では3名の参加者が笑っているが、(7)でも「確認」によって、ジョークを導入している。

- (7) Au15: I started Sydney Uni 2001. I have been involved in every single engineering review since then in one capacity or another. I've also helped out with one women's review and one science review,
- A16: Fair enough
- Au15: so 13 reviews.
- Au16: Women's review?
- A15: Uuh
- A16: You don't fit the normal bill.
- Au15: Yeah, I did stage materials. I did have my limbs shaved at the cast part.

(ALL: laugh) Um no, stage – the stage manager was a close friend of mine. They didn't have a lighting tech, they didn't have a spotlight operator, so basically I got a call when they were in the theatre saying, "Tom, we need someone who knows the tech." (No.50 p.20)

Au15: 僕は2001年にシドニー大学に入った。それから何らかの形でずっと工学系の論文レビューに関わってきたんだ。女性誌のレビューと科学論文のレビューも手伝ったことがある。

Au16: なるほど。

Au15: 全部で13になるね。

Au16: 女性誌のレビュー（女性のレビュー）って？

Au15: ああ

Au16: そんなタイプに見えないけど。

Au15: ああ、舞台装置に関係していたんだ。舞台の役ではすね毛を剃ったけど（全員笑う）じゃなくて、舞台監督が仲の良い友達で、照明の技術者が居なかったんだ。だから彼等が舞台にいるとき、僕は電話で呼ばれて「トム、機械がわかる人がいるんだ」と言われてね。（トムは仮名）

オーストラリアの会話(7)では Au15 が 13 もの学術関係のレビューに関係していたと言うと、Au16 は一応「なるほど」とあいづちを打ってから「女性誌のレビューだって？」と「確認」の質問し、Au15 は「そうだよ」と答える。Women's Review は「女性誌のレビュー」とも「女性のレビュー（舞台のダンス）」とも解釈できるので、Au16 は「君は女性誌に関係するようには見えないけど」と更に質問する。すると、Au15 は「出演のためにすねの毛を剃ったりしたよ」と舞台でラインダンスをしたとジョークで応じるが、実は舞台の照明の技術の手伝いをしただけなのである。ここでも、自分の経歴について紹介しながら、相手の「確認」の質問を利用しジョークを言い、参加者全員を笑わせている。

(8) B16:how old is yours?

B15: Six.

B16: Six.

B15: About 6 and 18 months.

B16: Your kids as well.

B17: Six. Just six.

B16: Six kids.

B17: Yeah.

B16: (laugh) But, all 6 years old.

B17: Yeah. (laugh) really....

(No.53 p.5)

B16: …君のところはいくつなの？

B15: 6才。

B17: 6才。

B15: 6才の子と18月。

B16: 君の子ども達も？

B17: 6。6だけ。

B16: 6人こどもがいるの？

B17: ああ

B16: (笑い) 6人で、みんな同い年か。

B17: ああ (笑い) ほんとにね。

これはイギリスの会話で参加者同士が自分たちのこどもについて話している。B16が他の参加者のこどもの年令について質問をすると、B15が「6才」と答え、もう一度「6才と18ヶ月」と言い、二人の子どもがあることがわかる。B16がもう1人に「君の子どもも？」と聞くと、B17が「6, 6だけ」と答える。この答えを利用し、B16は「6人子どもがいるの？」と「確認」の形式を利用し、冗談を言う。B17は「そうだよ」と応じ、B16は更に「6人で、みんな同い年か」と言って、3人で笑う。

(6)はアメリカ、(7)はオーストラリア、(8)はイギリスの会話データだが、それぞれ相手の発話を自分が正しく理解したかを確認する形をとりながら、(6)ではモスクワ滞在の話に熊が出てきたことの驚き、オーストラリアでは学術雑誌のレビューに女性誌が出てきたことへの意外さ、そして、イギリスの会話ではわざと間違っ解釈して、子どもの年令でなく、子どもの人数として聞き直しをすることにより会話の参加者全員が笑っている。量的な分析が出来るほど「聞き直し」も「確認」も数の上からは証明することは出来ないが、「聞き直し」「確認」の形をとりながら冗談を言ったり、相手をからかったりして初対面の会話の堅苦しさを緩和している様子が見える。

結論

英・米・豪の30分会話各々3件合計9会話の「聞き直し」を分析した結果、母語話者間の会

話であるので、多くの例はなく量的な比較をすることはできなかった。それぞれの例の機能について質的な分析を行い、「聞き直し」は相手の発話を聞き落とした際にする‘純粋な’「聞き直し」と、自分の理解が正しかったかを確かめる「確認」の用法がどの種類の英語にも見られた。また「聞き直し」も「確認」も前置きの表現、相手の許しを請う表現もなく使われ、日本語母語話者の異文化間会話に見られた自分が聞き取れなかったこと、理解できなかったことについて「聞き直し」をすることに対するためらいは見られなかった。

更に、どの種類の英語の母語話者についても特徴的なのは、「聞き直し」や「確認」の形を取りながら、初対面会話であるのにも関わらず、自分の驚きを表すためや、ジョークのために「聞き直し」を利用することである。これは、母語話者の他の言語ストラテジーでも使われるジョーク、感情の表現などとも共通の英語母語話者の語用指標であると思われる。時間的な制約から収集した30件の会話すべてを分析することはできなかったが、今回の分析に関しては英・米・豪の「聞き直し」の語用特徴に違いは見られなかった。今後の継続研究において量的な分析も含め、より多くのデータにおいても同じ結果が得られるかを検証し、今後の日本語会話と異文化会話の「聞き直し」の語用面の分析の比較の基礎としたい。

1 本研究は科学研究助成金による共同研究の一部であり、分析に使用した会話データは下記の共同研究のために収録したものである。

平成22年度～平成24年度 基盤研究(C) 22520595 (代表 津田早苗)

「国際語としての英語の語用指標解明と英語教育への応用—英語会話ができる日本人の育成」共同研究者は大学英語教育学会待遇表現研究会(代表 津田早苗)の会員である。

References

- 堀素子・津田早苗・大塚容子・村田泰美・重光由加・大谷麻美・村田和代. 2006. 『ポライトネスと英語教育: 言語使用における対人関係の機能』ひつじ書房
- 大谷麻美. 2007a. 「異文化間コミュニケーションにおける topic-shift—何がミスコミュニケーションを引き起こすのか—」『日本語コミュニケーション学会紀要』16巻第1号1—14.
- 大谷麻美. 2007b. 「対人関係を築くための異文化間コミュニケーション教育—その現状と課題—」『奈良大学紀要』第36号 53-68.
- Ozaki, Akito. 1989. *Requests for Clarification in Conversation between Japanese and Non-Japanese*. Pacific Linguistics Series B-102. Department of Linguistics Research School of Pacific Studies, The Australian National University.
- Pica, Teresa. 1987. Second Language Acquisition, and the classroom. *Applied Linguistics*. vol.8. 2-21.
- 重光由加・村田泰美・津田早苗. 2006. 「第1章異文化体験アンケート—対人関係の機能を中心として」『英

- 語教育とポライトネス』 pp. 5-33.
- 重光由加. 2008. 'A pause in conversation for Japanese for Native Speakers: A Case Study of Successful and Unsuccessful Conversation in Terms of Pause through Intercultural Communication' 『東京工芸大学紀要』 Vol. 30(2)11-18.
- Svartvik, Jan and Geoffrey Leech. 2006. *English: One Tongue, Many Voices*. Palgrave, MacMillan.
- Tsuda, Sanae. 2008. Clarifications in Intercultural Conversations. Paper presented at the 14th NATE/7th FEELTA conference held at Far Eastern National University, Vladivostok, Russia.
- Tsuda, Sanae, Murata, Yasumi, Otsuda Yoko, Hori Motoko, Shigemitsu, Yuka, and Otani, Mami. 2008. Intercultural Communication between Native and Non-Native Speakers: Japanese and English Conversation Styles and Rapport Development. 『JACET 中部25周年記念論文集』 pp. 57-82.